



# 巨人雜筆

大西巨人

講談社

巨人雑筆

一九八〇年二月二十九日第一刷発行

著者——大西巨人

© Onishi Kyojin 1980, Printed in Japan



発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二二三 郵便番号二三 電話東京〇三二九四二二二 振替東京八一三六〇

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——島田製本株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません。

目次

『神聖喜劇』を書き上げて

- I 「遅きが手ぎにはあらず」 12 10  
II 全五巻刊行後約三ヵ月の日に  
III 屯営前の鶏知川など 33

言語表現について

- 一 詞の由来吟味 38  
二 論理性と律動性と 46  
三 語法・行文における破格の断行 54  
四 緑雨作「小説」一篇 56  
五 杉田久女の一句 57  
六 冠辞「水薦苺」 59  
七 「解纜」および「抜錨」 61  
八 斎藤史のこと 62

遼東の豕

- 1 鼻 70
- 2 藤井真次先生 71
- 3 一冊の本 73
- 4 夜の道連れ 75
- 5 続夜の道連れ 76
- 6 ライフワーク 78
- 7 言葉遣いのこと 80
- 8 腰折れ歌 81
- 9 続腰折れ歌 83
- 10 犬またはその飼い主 85
- 11 続犬またはその飼い主 87
- 12 「巨人」という名 89
- 13 映画『巨人伝』のこと 90
- 14 油断大敵 92
- 15 雑多な記憶 94

16	屋の道連れ	95
17	共に墓穴を掘る者	97
18	不遇な作品	99
19	行き隠る	101
20	大河内伝次郎	103
21	間奏曲	104
22	篠栗線の男	106
	付録 奇遇奇縁	108
23	普門院さん	111
24	楽屋話し	112
25	出歯亀	114
26	名について	116
27	ある種の艶福	118
28	血のめぐり	120
29	糞リアリズム	122
30	続続犬またはその飼い主	124
31	ホール・イン・ワン	126

48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
車内風景(小説)	親不知	小歌一つ	言道筆塚	田能村竹田	続雑多な記憶	金子伊昔紅・兜太父子	待つ男(小説)	杉田久女	筑紫	伊良子清白	腹が立つ	本町通り	酒を煮る	伐木丁丁	走る男(小説)	花落知多少
157	155	153	151	150	148	144	142	141	139	137	135	133	131	129	128	

49 あと一回 159  
50 人生足別離 161

### 戦争・軍隊・革命

(イ) 兵隊日録抄 164  
(ロ) 二つの書信 172  
(ハ) 軍隊内階級対立の問題 175

### 井蛙雑筆

A 前口上 186  
B 「おらぶ」 188  
C 暗香疏影 190  
D 竹田と大塩との関係 192  
E 無学空想 195  
F アサクラ 198  
G 哀果作一首 200  
H 善磨追悼 202



I	秋の田	204
J	遊女妙	206
K	一人称小説	209
L	「運命」という語	211
M	天地無用	212
N	養老院	214
O	「塩垂れる」	218
P	「無き名」綺談	219
Q	「おらぶ」増補	228
R	「ウタチイ」	229
S	「ちふ」	232
T	短歌との因縁	236
U	『松倉米吉歌集』	240
V	「雲山草堂図」題語	245
W	破廉恥漢渡部昇一の面皮を剝ぐ	248

二つの体制における「特定の条件」抄

巨人雜筆

装帧·丹阿弥丹波子

『神聖喜劇』を書き上げて

# I 「遅きが手ぎわにはあらず」

旧臘きゅうろう下旬、私は、「近況」の報告を某紙から求められ、「過去十年間に二回、私は、この欄で近況を報じた。二回共、要旨は、目下『神聖喜劇』執筆中、近く完成予定。♦であった。すでに丸七年前の第一回目中に『二十年一日のごとく』という文句が存在した、と私は覚える（しかし、十二月下旬の今日、最終的に脱稿）。」云々と記した。

四月二十日過ぎに、その『神聖喜劇』最終二巻（第四巻および第五巻）は、刊行・発売せられた。幾人かの文学者、編集者、読者が、もはや今日（五月初旬）までに、『神聖喜劇』は永久に未完ということではなからうか、と案じていたが、とうとう出来上がったのは、なにしろめでたかった。』というような便りを呉れた。作中に、私は、国枝史郎作伝奇小説主人公の「意志は強し、生命より強し。」ないし道元の「この心あながちに切なるもの、とげずと云ふことなきなり。」という言葉を引いている。

いま率然と私の頭に、藤田東湖の「三たび死ヲ決シテ而モ死セズ／二十五回、刀水（利根川）ヲ渡ル」という詩句が浮かぶ。そのことは、「水戸学」にも『回天詩史』にも別に因縁があるのではない。それは、そんな深遠な動機からのことではないのであり、「二十五」という数字に単純に私的に連想が赴いたのである。

『神聖喜劇』（第五卷）の「奥書き」に、私は、泉鏡花作『外科室』の鏡花自身による「小解」（「書きが手ぎにはあらず」云云）に因み、『神聖喜劇』の一九五五年二月起稿・一九七九年十二月脱稿に関して、「遅きが手ぎにはあらず、其の事の思出のみ」に、起稿および脱稿の両日附を書き留めるのである。」と記した。

何事においても、「早きが手ぎは」ではしばしばあり得ても、「遅きが手ぎは」ではほとんどあり得ぬにちがいない。つまり、「二十五回渡刀水」にたいする私の観念連合は、起稿・脱稿間「不手ぎは」二十五年のゆえにである。

しかも私は、この二十五年間に、他の小説を一つも書いていないのであるから、ますます「遅きが手ぎにはあらず」でなければならぬ。四千七百枚の小説は、それとして決して短くはないけれども、月産数百枚の「流行作家」も、昨今かなり多いのである。月産千枚の作家も、なかなかいるらしい。仮りに月産六百枚の「流行作家」ならば、四千七百枚は、八ヶ月間で出来上がる量である。もっとも、私は、なかならず学芸における「即席物」をほとんど信用しない。

一昨年夏、『週刊読書人』紙上で、私は、——その夏、『神聖喜劇』を完成し得る、と私は考えていたのであった、——どんなに長い年月を費やして書いたところで、あるいはどんなに長い枚数を書いたところで、それは作の値打ちを保証するわけではない、という意味の（あたりまえなこと）を語った。昨秋、『朝日新聞』紙上で、篠田一士氏は、今日における「長篇小説」の盛行現象を是としつつも、「長いばかりが能ではない（長けりゃいいいもんじゃない）」という意味の（本来これもあたりまえなこと）注文を付けていて、私は、大いに同感した。

前記「近況」報告の後半に、私は、「私は、読者、出版社ほかにも長らく迷惑を掛けてきたが、この十二月に加筆修正を終わって最終的に完成することができた。第四卷、第五卷（最終二巻約千七

百枚)は、来春刊行せられるであろう。「劫初こまじより作りいとなむ殿堂てんどうにわれも黄金こがねの釘くぎひとつ打つ」(与謝野晶子)。／＼私の初期の仕事は、これで終わった。以後は、私の中期の仕事が、始まる。」と書いた。

葛飾北斎は、七十五歳までの彼の仕事は習作であり、それ以後の制作が本物である、と語ったそうである。七十五歳までには、まだ十数年間が私にある。北斎に学んで、私は、「私の中期」には、いっそう大奮発・大努力をしなければならない。

(一九八〇年五月六日)

## I 全五巻刊行後約三カ月の日に

もとこの文章内容は、新日本文学会主催「連続講座『神聖喜劇』を読む」の第五回として、一九八〇年七月十九日夜、文学会館で私が話した物である。その録音テープより筆記せられた草稿に、私は、かなり斧鉞きんぺんを加えた。

(一九八〇年七月二十九日)

一番の問題点として、「記憶力」のことをどなたもおっしゃるようですから、そのことから私は話し始めましょう。

現在の第一巻、第二巻に相当する部分が、約十年前に「カッパ・ノベルス」版の四冊で出ました。そのころ——いまもそれはあるのかもしれない、——NHK第一に「趣味の手帳」という番組、いろいろな人が随想ふうの話しを十五分間する番組がありました。NHKからディレクターが私の所に来まして、私も、二回続きで話しました。その録音テープに基づく草稿に私が加筆した物は、『新日本文学』一九六九年十月号に『表現の論理性と律動性』という題名で載っています。

とにかくそのとき、最初ディレクターが私に「記憶術について話してくれ。」と言ったので、私は、びっくりして、「記憶術」というのはどういふことか、自分はそんな「術」なんかには全然関係がない、と言いました。

作中主要人物「私」東堂太郎について、多くの人たちが「記憶力拔群」と言ったり、また「カッパ・ノベルス」版カヴァーの「著者紹介」に、「(東堂太郎は博覧強記であるが)、作者の友人たちは、こういう東堂は紛れもなく作者その人だと言うくらいだ。」と書いてあったり、したので、なおさらそんな状況が助長せられたようでした。

『神聖喜劇』は小説作品であって、東堂太郎は、「私」という一人称で書かれているけれども、もちろん作者とは全然別の作中(仮構)人物です。私自身は、小説の日本「私小説」的な作り方に大反対の人間である。また、私は、『神聖喜劇』を「自伝小説」として書いたのではない。つまり『神聖喜劇』は、「イッヒ・ロマン」、「一人称小説」である。——そういうことを、私は、説明しました。

すると、彼ディレクターは、「それなら記憶術の件は撤回する、何でもいから話してくれ。」と求めましたので、私は、その冒頭に次ぎのようなことを話しました。——「岩波新書」版サマセット・モーム著『世界の十大小説』(上)「スタンダールと『赤と黒』」の章に、「スタンダールは、ほ



かの誰にたいしてよりも、自分自身にたいして一番興味を持った。(中略)『赤と黒』の主人公ジュリアン・ソレルは、できれば自分がなりたかった種類の人物であった。(中略)スタンダールは、また、ジュリアンに、おどろくほどたしかな記憶を始め、勇氣、臆病、野心、するどい感受性、計算ずくの頭脳、邪推深き、虚栄心、怒りやすい性質、破廉恥、忘恩など、すべて彼自身の物を与えた。」という記述がある。そのように、往往にして作家は、彼自身における内在要素を拡大して作中人物に付与する。そういう意味においては、作中人物「私」東堂太郎と作者私とは関係が深い、ということにもなろう。……あらましそんなことを、私は、話したのでした。

日本には「私小説」的な伝統・風土があつて、たとえば作中主要人物について将棋六段と書いてあると、読者などが来て、作者に「あなたは将棋六段ですか。」とあたりまえのこととして質問する。そんな状態で読者は小説作品を読み、ある種の作家はそういう読まれ方を当てにして書く。その場合に、作中主人公は将棋六段だが、自分(作者)は将棋二段だ、と答えると、急に質問者(読者)は作者を軽蔑したような感じになる。作者が軽蔑せられるだけでなく、作品の値打ちも下がるらしい。

しかるに、あれは将棋六段と書いたが、実は自分は将棋七段だ、と答えたら、小説の値打ちも多かれ少なかれ上がる上に(笑)、作者の値打ちもそれ相当に上がるといふことになる。そのような伝統・風土が日本にはあるように私は思います。

欧米のことは、くわしくは知りませんが、欧米においては、日本のようなことはなからう、と私は思っています。そんな伝統・風土をまた当て込んで書く作家に関しては、事情は、下のようになります。つまり自分(作者)は将棋初段ぐらいの腕前でしかないが、作中主要人物を将棋六段と書いておけば、人(読者)は自分(作者)を将棋六段と考えはすまいか(考えるべきである)、とい